

アメリカ黒人の文学

——自己確認への戦い——

斎藤 忠利

文化史的、精神史的に言って、白人優位の原則が支配的なアメリカ社会に生きることが余儀なくされているアメリカ黒人の最大の不幸は、白人種の価値観によって自己を眺め、自己に対する白人種の評価を、自己の自己に対する評価として受け取らざるをえなかった点にある。そして、アメリカ黒人が自己を語ろうとした時、その支配者たる白人種の言葉でしか語りえなくなっていたという事実は、アメリカ黒人のアングロ・サクソン文化への同化現象として積極的に評価できる反面、その同化が、多くの場合、白人種に役立つ限りにおいて許された同化であっただけに、アメリカ黒人の心の中に自己が自己自身になろうとする烈しい欲求を育てたことも事実である。このようにして、アメリカ黒人は、同化と拒否との緊張関係の中で、痛烈な自己分裂ないしは自己疎外に悩んできたと言えるが、そのところを、現代アメリカ黒人解放運動の偉大な指導者たる W. E. B. Du Bois (1868 ~ 1963) は、その古典的な名著 *The Souls of Black Folk* (1903) の中で、次のように書いている——

エジプト人とインド人、ギリシャ人とローマ人、チュートン人とモンゴール人について、黒人は、いわば第7番目の息子として、このアメリカ世界に、ヴェールに包まれ、先見の才能をそなえて生まれ出たが、このアメリカの世界は、黒人に真の自己意識を与えず、他者の世界の啓示を通して自己を眺めることしか許さない世界なのだ。この二重の意識、たえず他者の眼を通して自己を見るという感覚、軽蔑と憐憫を楽しみながら見物している世界の巻き尺で自己の魂をはかるという感覚——このような感覚は、奇異なものである。いつも自己の二重性を感じている——アメリカ人であって黒人であること。二つの魂、二つの思想、調停されずにいる二つの争い、一つの黒い肉体の中で戦い合う二つの理想——その肉体を破裂させないでい

るのは、その肉体の頑強な体力だけなのだ。

アメリカ黒人の歴史は、このような争いの歴史——自己意識をもった人間になろうとする熱望、二重の自己を融合して、より良い、より真実な自己になろうとする熱望の歴史なのだ。このような融合を行なう際に、アメリカ黒人は、古い自己のいづれをも失いたくないと望んでいる。アメリカをアフリカ化しようとは思わない。というのは、アメリカは、世界とアフリカに教えることを、あまりにも多く所有しているからだ。アメリカ黒人は、自らの黒人の魂を、白いアメリカニズムの洪水の中で漂白させようとは思っていない。黒人の血は、世界に伝えるべき使信をもっていることを、知っているからだ。アメリカ黒人は、同じ人間からののしられたり、唾をかけられたりせず、その目の前で「機会」の扉が荒々しく閉ざされたりすることなく、一人の人間が黒人でありつつアメリカ人でありうるようにしたい、と望んでいるだけなのだ⁽¹⁾。

このような歴史情況のもとで、アメリカ黒人が、白人種に人間以下の存在として軽蔑されている自己を彼自らが軽蔑するという奇妙な事態に落ち込んだことは、痛ましい必然であった。そして、ここから、アメリカ黒人がその皮膚の故に自らを恥じなければならぬ、というような情況が生まれたのである。こうして、アメリカ黒人の精神生活は、烈しい自己嫌悪との戦いとなり、その戦いの中で、アメリカ黒人は、自己嫌悪に苦しむ自己を憎み、結局、このような情況に自分を追い込んだ白人種への憎しみをいやが上にもつのらせていく。このことは、アメリカ黒人が自己の姿を直視することを妨げ、白人種への憎しみの中で自らの人間性を失う結果に導きかねない。アメリカ黒人の文学は、このような困難な情況の中で、どのようにしてアメリカ黒人が、自己嫌悪の中にある自己を救い出し、白人種を烈しく憎みながらも、その憎しみを克服しようとしてきたかを、われわれに伝えてくれる。以下の小論は、アメリカ黒人の、自己が自己自身になろうとする戦いを、主として、Langston Hughes (1902 ~ 1967), Richard Wright (1908 ~ 1960), Ralph Ellison (1914 ~), James Baldwin (1924 ~) の作品において跡づけようとする試みである。

I

さて、アメリカ黒人の文学が、一部の読者の好奇心の対象としてではなく、アメリカ文化の有機的な構成要素の一つとして広く認められるようになったのは、一般に

「ニグロ・ルネッサンス」(“the Negro Renaissance”)と呼ばれる審美的な芸術運動が行なわれた 1920 年代あたりからである、と考えられるが、この芸術運動の開幕を告げる先駆者的な文学作品は、なんといっても、James Weldon Johnson (1871 ~ 1938) の編んだアンソロジー *The Book of American Negro Poetry* (1922) であろう。このアンソロジーには、48 ページにも及ぶ序文がつけられていたが、このように長い序文が書かれなければならなかったという事実は、それまで「ものを書く黒人」というイメージが、アメリカ社会において、いかに例外的な、奇異で珍らしいものとして受けとられていたかを示している。編者の Johnson は、それから 10 年後の改訂版に、改訂版のための序文を書き加え、その中で、そのように長い序文を初版本のために書いた理由として、次のように言っている――

この本が、わずか 10 年前に編纂された時には、芸術の創作者としての黒人という概念が、あまりにももの珍らしく、実際のところ確立されていなかったので、黒人作家による詩のアンソロジーを世に送るにあたって、いささか長い序文を書く必要がある、と感じたのであった。そこで、黒人がアメリカ文化にたいして行なった主要な貢献に注意を喚起し、黒人のもつ創作力、表現力のために、いささか弁じようとして、48 ページものページ数をあてたのであった⁽²⁾。

ところで、「ニグロ・ルネッサンス」は、なによりも、黒人詩の開花によって特徴づけられるが、アメリカ黒人が自覚的に自己を語ろうとした時、その言葉が詩になったということは、人間精神の高揚の中から詩が生まれる、という文学現象の不変の法則によって説明されるであろう。(ちなみにアメリカ黒人は、その支配者たる白人種の言葉で語ることに抵抗を感じて、その言葉に破壊作用を加え、結果的に詩で語ることになった、とするサルトル流の魅力ある説明⁽³⁾は、この場合には成り立たないように思われる。アメリカ黒人は、白人種の言葉に、あまりにも長く馴らされてしまっていたからである。) ともあれ、「ニグロ・ルネッサンス」は、ながらく自己の皮膚を恥じざるをえなかったアメリカ黒人が、自覚的に黒人であろうとした、その姿勢において、アメリカ黒人の自己確認への道をきりひらくものであった。

Richard Wright によれば、この「ニグロ・ルネッサンス」の行なわれた時期は、アメリカ黒人の意識の上に大きな変革が起こった時期であって、第 1 次世界大戦後の不安の中に台頭したソヴィエト・ロシアが世界の被圧迫民族に呼びかけた言葉に、アメリカ黒人が敏感な反応を示し、その人種意識が、かなりのところまで階級意識にかわり、包括的な労働階級が起こるにつれて、アメリカ黒人は、階級的な自己確認を行

ない、アメリカ黒人としての一体感のなかで作家活動を行なうことが、はじめて可能になった、とされる⁽⁴⁾。

もちろん、このような明らかに左翼的な立場をはなれたところで、「ニグロ・ルネッサンス」を準備した要因を、いくつか指摘することができるが、その一つは、「大移住」として知られるアメリカ黒人の都市集中である。およそ 1910 年から 1920 年まで、アメリカ南部の総計 50 万人にも及ぶ黒人たちは、折からの世界大戦を契機とする北部の工業都市の人手不足を補うために、主として、ニューヨーク、シカゴ、デトロイト、フィラデルフィアの四市に移り住んだ。こうしてアメリカ黒人は、都会での共同生活の中で、アメリカ黒人としての共通の運命を自覚し、そのような連帯感の中から黒人であることに積極的な意味をつかみとろうとしたと考えられる。このことは、「ニグロ・ルネッサンス」が、この「大移住」の結果アメリカ黒人の中心地——いわば、アメリカ黒人の首都となったニューヨーク市のハーレムを主要な舞台として行なわれた事情を、よく説明するであろう。

次に考えるべきことは、第 1 次大戦後の精神的な混乱の中で、「西欧の没落」を身をもって感ずるようになった白人種が、黒人種のもつ健康な原始性、生命力の強さなどに憧れを抱き、こうして黒人種への関心が高まったことである。アメリカ黒人の生んだ音楽たるジャズのテンボが、その時代精神をあらわすものとして歓迎され、アメリカ社会において一般に“Jazz Age”と呼ばれた 1920 年代は、まさにアメリカ黒人が発見され、見直された時代であった。

最後に、一見小さいことのように重大な要因は、少数ではあるが心ある白人芸術家が、アメリカ黒人の芸術的な才能を発掘しようと努めたことである。たとえば、「ニグロ・ルネッサンス」を代表する詩人 Langston Hughes を世に送り出したのは、2 人の白人作家、Vachel Lindsay (1879 ~ 1931) と Carl Van Vechten (1880 ~) であった。Lindsay は、Hughes が給仕の助手として働いていたホテルの食堂で、その食卓の皿のそばに置かれていた Hughes の 3 篇の詩を、そのホテルで開かれた詩の朗読会で読みあげて、Hughes の詩が世人の注目を集める道を開き、Van Vechten は、雑誌“Opportunity”の文芸コンテストに入賞した Hughes の詩に興味を抱き、Hughes の最初の詩集 *The Weary Blues* (1926) のために“Introducing Langston Hughes to the Reader”と題する好意に満ちた序文を書いて、Hughes が世に出るのを助けている。

以上二つの立場のいずれをとるにせよ、一つだけ客観的な事実として指摘できることは、「ニグロ・ルネッサンス」が、そのエネルギーないしは生命を、Du Bois のい

わゆる「才能ある 10 分の 1」⁽⁵⁾、つまり例外的な黒人インテリ層からではなくて、アメリカ社会の底辺に生きる黒人大衆——庶民としてのアメリカ黒人から得ている事実である。このことは、なによりも「ニグロ・ルネッサンス」の詩人 Hughes が、黒人大衆の歌に他ならない“blues”を詩にまで高めた詩人であることによって証明される。Hughes は、「ニグロ・ルネッサンス」の高まりの中で、黒人大衆との連帯感に生きつつ、歌い始める——

PROEM

I am a Negro:

Black as the night is black,
Black like the depths of my Africa.

I've been a slave:

Caesar told me to keep his door-steps clean.
I brushed the boots of Washington.

I've been a worker:

Under my hand the pyramids arose.
I made mortar for the Woolworth Building.

I've been a singer:

All the way from Africa to Georgia
I carried my sorrow songs.
I made ragtime.

I've been a victim:

The Belgians cut off my hands in the Congo.
They lynch me now in Texas.

I'm a Negro:

Black as the night is black,
Black like the depths of my Africa.⁽⁶⁾

この「序詩」には、アメリカ黒人の自己宣言ないしは自己主張が、高らかに歌いあげられている。そして、アメリカ黒人の屈辱的な過去は、直視されることによって、その自己宣言を支えるものとなっている。アメリカ黒人の「黒さ」は、もはや恥ずべきものではなく、豊かで神秘的な生命をはぐくむ「夜」の「黒さ」に通ずるものとし

て積極的に評価される。日のあたらない「白い昼」は終わらなければならない。待たれるのは「おだやかに訪れる、暗い夜」である。

DREAM VARIATION

To fling my arms wide
 In some place of the sun,
 To whirl and to dance
 Till the white day is done.
 Then rest at cool evening
 Beneath a tall tree
 While night comes on gently,
 Dark like me, ——
 That is my dream !

.....

.....(7)

以上のような、白人優位の原則は破棄されなければならない、とするアメリカ黒人の自己主張は、結局のところ Hughes の詩において、「ぼくだってアメリカだ」(“I, too, am America.”) という表現をとるが⁽⁸⁾、このことは、Hughes が、アメリカ黒人の自己確認は、アメリカをアメリカ建国の理念に立ち返らせることによって可能である、とする認識に立っていることを示している。そのところをよく示す作品として、“Let America Be America Again” という長い詩があるので、その一部を引用してみよう。

Let America Be America Again

Let America be America again.
 Let it be the dream it used to be.
 Let it be the pioneer on the plain
 Seeking a home where he himself is free.
 (America never was America to me.)

.....

.....

O, let my land be a land where Liberty
 Is crowned with no false patriotic wreath,
 But opportunity is real, and life is free,
 Equality is in the air we breathe.

(There's never been equality for me,
 Nor freedom in this "homeland of the free.")

.....

.....

O, yes,
 I say it plain,
 America never was America to me,
 And yet I swear this oath —
 America will be !
 An ever-living seed,
 Its dream
 Lies deep in the heart of me.

We, the people, must redeem
 Our land, the mines, the plants, the rivers,
 The mountains and endless plain —
 All, all the stretch of these great green states —
 And make America again ! ⁽⁹⁾

「アメリカは、ぼくにとってアメリカであったためしがない」と書いて、黒人問題に露呈されたアメリカ民主主義の矛盾を衝き、「アメリカをアメリカたらしめよ」と歌いあげるこの長詩は、格調の高い、みごとな詩として読む者の心に強く訴えるものをもっている。しかしこの訴えは、その基本的な立場が、アメリカ黒人にとってはついに一つの神話でしかなかったアメリカ建国の理念——アメリカ憲法が、その第1条、第9節、第1項において、1808年まで、黒人奴隷の輸入を法的に保障していた事実を想起せよ！——への、あまりにも無反省、あまりにも楽観的な信頼に基づいているだけに、アメリカをアメリカにせよ、と言うときの「アメリカ」の正体が十分に吟味されず、その結果、アメリカ黒人の自己実現の夢を、具体的な内容をもたない、漠然たる夢に終わらせかねない弱味をもっている。

このような意味において、黒人大衆との連帯感の中で自己を確認しようとした「ニグロ・ルネッサンス」の運動は、それが一種の芸術運動に終始したことの結果として、アメリカ黒人の自己を位置づける、それ自身の明確な原理をもたず、そのために、アメリカ黒人の高らかな自己宣言を、いわば、芸術的な意匠として用いたにとどまった、とさえ言えるように思われる。

現に、高らかな黒人としての自己宣言をもって出発した Hughes は、無数の悲痛な体験を通じて「河のように深くなった⁽¹⁰⁾」黒人種の魂の深みに降り立って、自らが黒人であるという事実を超越しようとさえする。そしてその一方で、現実問題として、差別に苦しむアメリカ黒人の明日への希望は、したたかに生きる庶民としてのアメリカ黒人のたくましい精神に託すべきものとしている。

以上のような、Hughes によって代表される「ニグロ・ルネッサンス」は、徹底を欠いたその立場からして、とうぜん批判の対象とされるべき運命にあったが、これを批判した James Baldwin は、この運動について次のように書いている――

ぼくがこの世に生まれ出た時、ニグロ・ルネッサンスと呼ばれるものが行なわれていた。その時期の生残りとしてもっとも著名な人物が、Langston Hughes 氏である。このニグロ・ルネッサンスというのは、黒人も、歌や踊りの他に、行動したり、ものを書くことができるのだ、ということをも白人たちが発見した――そういう意味のことを婉曲にあらわす言葉で、このルネッサンスは、永続きしない運命にあった。やがて、不景気がやってきて、黒人芸術家――すなわち『高貴なる野蛮人』――は、戦闘的な黒人、つまり『新しい黒人』に道をゆずる運命にあった⁽¹¹⁾。

II

Baldwin のいわゆる「戦闘的な黒人」の文学は、Richard Wright の作品によって代表されるが、1930年代の不況下に、共産黨員としての活動のなかから作家として登場した Wright は、アメリカ黒人をアメリカ社会における白人優位の原則の被害者として捉え、アメリカ黒人がそのような原則に苦しまざるをえない事態に烈しく抗議することをもって、文学者たる自己の使命としていた。Wright にとって、文学とはとりもなおさず抗議であって、Wright は、Baldwin にむかって、「文学は、すべて、抗議だ。抗議でない小説の作品名を、ただの一つでもあげることはできない」と語った、と言われる⁽¹²⁾。

Wright の第一作、短篇集の *Uncle Tom's Children* (1938) は、追いつめられた黒人がアメリカ社会における権力者たる白人に抵抗して殺される物語と、被圧迫民族の団結を呼びかける共産主義のイデオロギーこそアメリカ黒人解放の道を開くものだと訴える物語、計5篇をおさめて、かつての黒人奴隷の子孫であるアメリカ黒人の実情を示そうとしたものであるが、周知のように Harriet E. Stowe (1811 ~ 1896) の *Uncle Tom's Cabin* (1852) に由来する“Uncle Tom”が、「白人におもねる黒人」の意味に用いられるようになっていることを考え合わせると、この短篇集は、アンクル・トムの子供たちは、もはや「アンクル・トム」ではない——アンクル・トムの子供たちは、たとえ追いつめられて殺されようとも、あくまでも主張すべきところは主張し、抵抗はやめない、と言っていることになり、ここに、白人支配に抵抗する戦闘的なアメリカ黒人の烈しい自己主張があらわれている、とみることができる。

Wright の代表作、長編小説の *Native Son* (1940) は、アメリカ黒人による抗議文学の総決算とされる成功作であるが、Wright は、白人優位のアメリカ社会が陰に陽にアメリカ黒人に加える心理的な圧力のために、まったく偶然の事情から白人の女を殺し、その死体を切断して焼却する黒人青年 Bigger Thomas ——白人に対して本能的な憎悪の念と恐怖心を抱く反面、人間として本来もつべき罪意識はまったく持ち合わせていない「不良黒人」を、まさにアメリカ社会が生んだ息子、アメリカが、自らの責任において、引き取らなければならない生粋のアメリカっ子 (“native son”) と呼んで、このような「息子」を生んで育てたアメリカ社会を手きびしく告発するのである。

もとより、Bigger Thomas の犯行の責任を、ひたすらアメリカ社会の責任として追求することは、人間が自らの行為の責任をになうことによって人間となる、という道を、Bigger Thomas に対して閉ざすことになるので、Wright は、Bigger Thomas が、その偶然の犯行の責任を問われる立場に追い込まれた時、その犯行を、遡及的に、Bigger としては最初の主体的な行為として自覚する、という設定によって、アメリカ社会において失われていた Bigger Thomas の人間性の回復をはかろうとする。そこで、Bigger Thomas の物語は、アメリカ黒人が殺人行為の責任を問われることによって人間となる、というテーマを展開させていることになるが、ここにおいて明らかにされることは、アメリカ黒人が自己実現をはかろうとすれば、白人優位のアメリカ社会においては、それは必然的に反社会的な行動——アメリカ社会からの逸脱という形をとらざるをえない、とする Richard Wright の基本的な認識である。この認識は、アメリカ南部に生まれ、育った Wright 自身の体験に深く根ざした認識

であって、そのところを、Wright は次のように書いている——

なるほど、わたしは嘘もついたし、盗みもした。たぎり立つ怒りの感情を抑えるのに苦労した。喧嘩もした。わたしが殺されずにすんだのは、単なる偶然だったのかもしれない。……だが、拒否すること、反逆すること、攻撃に出ること、それ以外に、わたしが自然にふるまい、実在する人間として、本来のわたし自身となる、どのような道を、南部は、わたしに許してくれたというのだろうか⁽¹³⁾。

このような Wright の基本的な認識から出発するかぎり、白人種を権力者とするアメリカ社会は少数派たるアメリカ黒人の自己実現を阻む社会である、とされ、自己実現を願うアメリカ黒人に残された道は、論理の赴くところ、アメリカ社会の外に出ることだけとなる。そしてその道は Wright 自身が選んだ道であった。

Wright は、その期待を裏切った共産党との関係を断って間もなく、1946年に妻子を連れてパリに高飛びしたが、アメリカ黒人がアメリカ社会から脱出することは、アメリカ黒人がアメリカ社会の歴史的産物であることを考えると、アメリカ黒人がその自己を位置づけるべき場所を失うことに他ならず、このようにして果たされる自己実現は、虚空に自己を拡散させるようなものであった。現に、Wright がパリで書くことになる長編小説 *The Outsider* (1953) は、その自己が自己でなくなった男の物語であって、交通事故で死亡したことになった主人公の黒人 Cross Damon は、このようにして得られた自由を利用しようとして、次々に無意味な殺人をかさね、最後には自分が殺されてしまう。Wright が、この作品において、自己喪失の中で身を滅ぼしていく男を描いていることは、アメリカ社会を脱出して帰るべきところをもたなくなったアメリカ黒人の苦しみ——他でもない Wright 自身の自己喪失の苦しみの表明であった。しかも Wright が生前に発表した最後の長編小説 *The Long Dream* (1958) は、またしても、アメリカ社会を脱出するアメリカ黒人の物語なのである。

たしかに、アメリカ黒人としてアメリカ社会に生きることは、いつ果てるともしれぬ「長い夢」、「長い、恐怖と緊張と不安の夢⁽¹⁴⁾」の中に生きること——自己が自己でない世界、自己が自己を知る機会をもてない世界、そこで行なわれることに対して責任の取りようのない世界、自覚的に生きることが許されない世界、いつなんどき思わぬ生命の危険にさらされるかもしれない世界の中に生きることである。しかしアメリカ黒人の自己が自己となる場所は、他ならぬアメリカ社会でなければならないことを、自己実現を果たそうとしてアメリカ社会を脱出した Wright 自身が、自らの自

己喪失を作品化していることによって図らずも示している。

Wright の悲劇は、前述した Wright の基本的な認識に胚胎していた。Wright は、アメリカ社会における白・黒両人種の間係を、ひたすら、搾取する者と搾取される者、加害者と被害者の関係として捉え、アメリカ黒人の自己実現への戦いを、いわば一種の階級闘争と考える、あまりにも直截な論理に基づいて、その文学を烈しい抗議の叫びとしたのであったが、このような直截な論理によっては、アメリカ社会の構造とその歴史とに深くかかわりながら作り出されてきたアメリカ黒人の存在の複雑で曖昧な性格は掴みえず、そのために、その烈しい抗議の叫びも、理屈ぬきで白人種を憎む呪いの声、ないしは「去勢される男のわめき声⁽¹⁵⁾」のごときものとなって、アメリカ社会の中でアメリカ黒人が自己実現をはかるための積極的で建設的な役割を果たしえない結果に終わっている。したがって、アメリカ黒人の自己実現が、具体的な内容をもつものとして、アメリカ社会の中で達成されるためには、まずアメリカ黒人として生きることの意味、「ニグロであること」(“négritude” ないしは “Negroness”) が、アメリカ社会において、どのような意味をもっているかが吟味されなければならない。この困難な仕事を、すぐれた小説の形で成し遂げたのが、Ralph Ellison である。

III

さて、前章においてみたように、Wright によって代表される抗議派の文学が、その烈しい自己主張にもかかわらず、アメリカ社会の中でアメリカ黒人の自己実現を達成する建設的な姿勢をもちえなかったのは、アメリカ社会における白・黒両人種の間係が、単純・明快な、階級としての利害の対立を内容とするような関係ではなく、加害者が同時に被害者であり、被害者が同時に加害者である、というような、きわめて微妙で複雑な関係、たとえば複雑な家庭の事情にも似た関係であって、そのために、被害者意識から出発した抗議は、その対象を明確化できなかったためである。

Ralph Ellison は、Richard Wright と知り合い、共産党と関係をもちながら作家活動に入っただけに、Wright とほぼ同じ地点から出発しているのであるが、上述したようなアメリカ黒人の置かれている複雑・微妙な立場を充分に認識し、アメリカ黒人がアメリカ黒人なるが故に陥らざるをえない自己疎外——二重、三重の意味における疎外状況を、アメリカ黒人が「見えない人間」である、とする比喻によって捉えようとする。

その代表作、長編小説 *Invisible Man* (1952) は、「人間」として見て貰えないため

に「見えない人間」となっている黒人の語り手が、「見えない人間」となった経緯を悪夢的な体験として語る作品である。主人公の語り手は、奨学金を与えられてアメリカ南部の黒人大学に入学するが、黒人学長の裏切り行為によって放校となり、烈しい幻滅感を味わい、北部に来てからは、共産党とおぼしき政治団体に黒人であることを利用されて、これまた烈しい幻滅感におそわれる。「見えない人間」とされていく語り手の悪夢的な体験は、白人優位のアメリカ社会に生きるアメリカ黒人が、味わうことを余儀なくされる幻滅の連続であるが、その幻滅のたびに、この主人公は、その個性を捨て去り、制度や組織のために役立つ道具となることを強要される。そして最後には、ハーレムに発生した人種暴動の真っ只中で、本来戦うべき相手ではない黒人の民族主義者と争い、その精力を使い果たして、マンホールに落ち込み、そこで「見えない人間」として地下生活を始める。しかしその生活の中で自らの「不可視性」を凝視した主人公は、アメリカ黒人を「見えない人間」たらしめ、その正体を見失わせてきたアメリカ社会こそ、アメリカ黒人がその正体を取り戻すべき場所に他ならないことを悟り、自己の正体を再発見しようと、その決意を新たにするのである。

以上のようなプロットを基軸として構成されているこの小説の、すぐれた特色の一つは、主人公の体験を伝えるエピソードの数々が、それぞれ、アメリカ黒人がアメリカ社会の中で作り出されてきた歴史的な状況を反映し、アメリカ黒人の微妙で複雑な、社会的・文化的性格を示す象徴としての役割を果たしている点である。

地下生活者の主人公は、黒人音楽のレコードを聞き、その昔、黒人教会に出席した時の経験を思い出しながら、その体験談を始めるのであるが、このように最初から、アメリカ文化における黒人種の役割が暗示され、ついで黒人種が白人種の慰み物とされた事実、黒人種を動物と見做すことによって白人種が、その人種的優越性という虚妄を確保した心理的な操作、アメリカ北部の資本がアメリカ南部を支配して黒人種の教育を行なった事実がもつ意味、白いアメリカを白くするために黒人種が目立たない所で働かされている皮肉な事態、その結果、黒人種が、その正体を見失うことを余儀なくされるという疎外状況、さらには黒人種が黒人種であることだけで黒人解放を標榜する団体に利用され、そのことによって一段と深刻な自己疎外に追い込まれるというような痛ましい状況などが、象徴的に示されている。このようなシンボリズムの手法は、登場人物の名前にまで適用されていて——ほんの一例をあげれば、アメリカ南部の黒人大学の理事、Mr Norton の “Norton” は、“Northern”（「北部人」）を暗示し、アメリカ南部を経済的に支配する北部産業資本主義を象徴する——まことに心憎いばかりであるが、そのシンボリズムは、アメリカ社会におけるアメリカ黒人を

「見えない人間」として捉える認識において頂点に達する。そして主人公の黒人が、自らの不可視性を、去勢される痛みとして自覚するという設定は、アメリカ社会の中に黒人として生きる人間の複雑な苦しみを伝えてあますところがない。

こうしてアメリカ黒人の文学は、アメリカ黒人のかかえている問題を、Wright などの抗議小説がついに達しえなかった深みにおいて捉える作品を得たことになる。アメリカ黒人としてアメリカ社会に生きる人間の立場の曖昧さ、またその苛立たしさが、その歴史的、社会的、文化的なコンテキストの中で解明されるということは、アメリカの白人社会が押しつけた正体以外の正体をもたないアメリカ黒人、つまり自己自身の正体をもたないアメリカ黒人の正体が明らかにされることであり、かくして問題の所在は明確となり、自己を失ったアメリカ黒人が自己を獲得すべき方向は見定められたことになる。そしてこのようにして開始されるアメリカ黒人の自己実現を、具体的な内容をもつものとして、前向きの姿勢で考えようとしているのが、James Baldwin に他ならない。

IV

ところで、Baldwin の姿勢が前向きで、建設的である、といえるのは、Baldwin が、アメリカ黒人の自己実現を、抗議派の Wright などのように、白人種との対立ないしは相剋という形で達成しようとするのではなくて、「アメリカ人」というものを、白・黒両人種の協調によってこれから作り出されるべき人間像として理解し、アメリカ黒人を、その人間像樹立のための協力者としてアメリカ社会に位置づけることによって、その自己実現をはかろうとするからである。Baldwin には、“Everybody’s Protest Novel” という有名な論文があるが、それによれば、Wright の抗議小説は、むき出しの憎悪を白人種に投げつけることに他ならず、その憎悪はアメリカ黒人の人間性を歪め、また憎しみは、憎しみを生んで、これによって白・黒両人種を、ともども奈落の底に突き落としかねない。ここに、Baldwin の「抗議に対する抗議」がある。そしてその抗議が、Baldwin の Wright 批判となるのであるが、Baldwin は Wright の *Native Son* を批判して、次のように言う――

Bigger の悲劇は、寒いとか、黒いとか、腹をすかしているとかいうことでもなければ、アメリカ人、黒いアメリカ人だということさえない。そうではなくて、彼が彼を生かそうとしない神学を受け入れてしまっていること、自分が人間以下の

存在である可能性を認め、そのために、生まれた時に受けついだ例の残忍な基準に従って、自らの人間性を戦い取らざるをえないと感じていることなのだ。しかし、われわれの人間性とは、われわれが背負わされているもの、つまり、われわれの生命のことであって、それを戦い取る必要などないものなのだ。われわれは、それよりも遙かに困難なこと——すなわち、それを受けとることを、しさえすればよいのだ。抗議小説の失敗は、それが、生を、人間を拒否し、人間の美しさ、怖れ、力を否定し、人間を類別することだけが現実的で、それは超越できないと言い張るところにある⁽¹⁶⁾。

このような抗議小説に対する抗議によって作家として出発した Baldwin は、まずアメリカ人としての人間像形成に参加すべきアメリカ黒人の正体を、西欧文明ないしはキリスト教文化の私生児として捉える。(ちなみに、Baldwin におけるこのユニークな認識は、一つには、Baldwin が、再婚した母の連れ子として、継父の憎しみと白眼視の中に成人したという個人的な経験に基づいて形成された認識であり、また一つには、筆舌に尽くしがたい苦しみをともなったキリスト教への入信の体験—— Baldwin は、自分を救いに導いたキリスト教の神が、アメリカ社会に黒人問題の発生を許し、アメリカ黒人を苦しみの中に見捨てた神として、けっきょく「白い」神ではなかったか、という深刻な疑問に悩まされている——を通じて確認された認識である。) しかしこの認識は、アメリカ黒人が私生児として見捨てられたままでよい、とするのではなくて、私生児が生長すべき場所は、なによりもその私生児の母胎に他ならぬ西欧文明ないしはキリスト教文化、つまり具体的には、アメリカ社会でなければならない、とする。ここから、アメリカ黒人の自己実現の場は、アメリカ社会の他にはありえない、とする Baldwin の立場がうち出されてくる。

Baldwin の文名を確立した最初の長編小説 *Go Tell It on the Mountain* (1953) は、10 年にも及ぶ Baldwin のヨーロッパへの自己追放の中で書きあげられ、Baldwin が 14 歳の時に味わった宗教体験——キリスト教への入信を作品化した小説である。主人公の、感受性の強い、14 歳の黒人少年 John Grimes は、彼自身の内部における性の目覚めに伴う怖れと、外の世界の醜悪さ、とくに、目には見えない白人社会の圧力に対する恐怖心に捉えられながら、神秘的で苦痛に満ちた、キリスト教への入信を果たす。そしてこの John Grimes の「入信」を中心テーマとして、それに John の肉親たち——継父の Gabriel、母親の Elizabeth、伯母の Florence——の、罪に満ちた、暗い過去を伝えるエピソードが語られていく。しかもそのエピソードは、

John 少年が入信する夜の祈禱会で、その3人が、それぞれ祈りを捧げる際の回想として、フラッシュバックの手法によって語られており、それによって、Grimes 一家の過去の生活が明るみに出され、John 少年は、そのような複雑な過去の集積を一身に背負った人間として、暗く深い人間の罪業からの救いを、その入信によって達成するのである。

この小説の最大の功績は、上述した Baldwin におけるアメリカ黒人の私生児性の認識——アメリカ黒人が西欧文明ないしはキリスト教文化の罪業を背負わされている、とする認識——をみごとに客観化し、そのことによって、アメリカ黒人が、アメリカ社会の中で歪められた自己の醜さを知り——ちなみに、主人公の姓 Grimes は、“grime”（「汚れ」）に通ずる⁽¹⁷⁾——しかも、醜い存在として捨てられたままであってはならない、とする立場にたって——John 少年が救われる、という設定は、そのことを示す——アメリカ黒人としての自己実現を果たすべきことを暗示している点にある。

Go Tell It on the Mountain 以後の Baldwin の仕事は、作家としての仕事と、エッセイストとしての仕事の二つに別かれ、創作としては、長編小説 *Giovanni's Room* (1956), *Another Country* (1962), 戯曲 *Blues for Mister Charlie* (1964), 短篇集 *Going to Meet the Man* (1965) と続くが、二つの長編小説では、男色の問題と、白・黒両人種の男女の幾通りもの実験的な組合せを設定して、性の壁、人種の壁をつき破って人間が人間を愛する愛の可能性を探りながら、その可能性を探るなかでアメリカ黒人が自己を確認し、その自己実現を成就すべきことが暗示されているようである。その題名が白人中心のアメリカ文化に対する黒人種の貢献を象徴する戯曲作品 *Blues for Mister Charlie* は、——“Mister Charlie” は、黒人が白人を総称的に呼ぶ言葉——白人による黒人青年の殺害事件をモデルとして、白・黒両人種間の宿命的な対立を描く作品であるが、このような事態の絶望的な暗さを認めながらも、Baldwin は、殺された黒人青年のかつての恋人に、祈禱会に出かける黒人たちの行列に加わろうとする白人にむかって、‘Well, we can walk in the same direction’⁽¹⁸⁾ と言わせて、白・黒両人種の協調を呼びかけている。

そこで、Baldwin の芸術作品はプロパガンダではないか、という批判を招く危険が生ずるのであるが、このことは、たしかに芸術家としての Baldwin にとって大きな問題である。つまり Baldwin は、自分の言いたいことがわかりすぎていて、それがその文学の芸術性を損いやすいのである。しかし逆に、そのことは、エッセイストとしての Baldwin のなによりの強みであって、その論文集 *Notes of a Native Son*

(1955), *Nobody Knows My Name* (1961) および *The Fire Next Time* (1963) は、それぞれ論旨の鮮明な、格調の高い文章を納めている。

これらの論文集を通じて読みとることのできる Baldwin の基本的な立場は、すでに本章の最初において言及したように、アメリカ社会における白・黒両人種を、「アメリカ人」としての ‘identity’ を確立する必要性によって分かちがたく結び合わされた者同志として理解するところにある。そこで両人種は、いわば結婚したも同然であって、好むと好まざるとにかかわらず、もはや離れることができない。残された道は、両者がお互いに愛し合うことを学ぶことであり、そのためにはなにによりもまず、アメリカ社会における白人種が、白人優位の原則という虚妄、皮膚の色に価値を置こうとする迷妄から覚醒して、自己を知り、自己を愛し、お互いを愛し合うことを学ばなければならない。そしてアメリカ黒人は、愛情をもってそのような白人種の虚妄からの覚醒を助けるべきであり、それによって、白人種が自らの問題を転嫁するための黒人問題を必要としなくなった時、アメリカ黒人の自己実現は、白・黒両人種がお互いを必要としつつ「アメリカ人」という人間像を作りあげていく過程の中で、達成されるであろう。

このような立場にたって発言する Baldwin の姿勢は、ときに預言者の姿を連想させるが、とくに *The Fire Next Time* は、アメリカ社会において白人優位の原則を生んだキリスト教文化を批判しつつ、しかも黒人種の過激な民族主義を斥けて、白・黒両人種の協調を説く、預言者的な情熱に満ちた警告の書である。著名な批評家 Alfred Kazin が、Baldwin を ‘an absolutely first-class essayist, reporter, and social critic’ と呼んで、その論文集を高く評価している⁽¹⁹⁾のも、故なしとしない。

注

1. W. E. B. Du Bois, *The Souls of Black Folk* pp. 3—4.
2. James Weldon Johnson (ed.), *The Book of American Negro Poetry* (A New Revised Edition) p. 3.
3. Cf. サルトル「黒いオルフェ」(『シチュエーションⅢ』pp. 159~201.) 訳注によれば、「黒いオルフェ」は、1948年、レオポルド・サンゴール編『ニグロ・マダガスカル新詞華集』の序文として書かれたものとのことであるが、白人種の出身であるサルトルが、黒人種のかかえている問題をこれほど深く探りえたことは驚嘆に値する。この評論を読むように勧めて下さった鈴木道彦氏に深く感謝の意を表する。
4. Cf. Richard Wright, *White Man, Listen!* pp. 141~142.
5. Cf. “This Talented Tenth” (Du Bois, *Op. cit.* p. 105.)

6. Langston Hughes, *The Weary Blues* p. 19.
7. *Ibidem*, p. 43.
8. *Ibidem*, p. 109.
9. Cf. Langston Hughes and Arna Bontemps (ed.), *The Poetry of the Negro 1746—1949* pp. 106~108.
10. Cf. Langston Hughes, “The Negro Speaks of Rivers” (*The Weary Blues* p. 51.)
11. James Baldwin, *Nobody Knows My Name* p. 143. なお、引用文には、「その時期の生残りとして……」とあるが、Hughes は、その後、1967 年に死亡している。
12. Cf. *Ibidem*, p. 197.
13. Richard Wright, *Black Boy* pp. 193—194.
14. Cf. *Ibidem*, p. 189.
15. Cf. James Baldwin, *Op. cit.* p. 188,
16. *Idem*, “Everybody’s Protest Novel” (*Notes of a Native Son* p. 9.)
17. Cf. Robert Bone, *The Negro Novel in America* p. 223.
18. James Baldwin, *Blues for Mister Charlie* p. 121.
19. Cf. Alfred Kazin, *Contemporaries* pp. 254~258.